

どうなる精神障害者の老後・・・不安がいっぱい

2025年度年金制度の改正法案が国会を通過し成立しました。少子高齢化の加速が深刻感を増していく中で精神障害者の老後はどうなるのでしょうか。人並みの生活を維持していく収入を確保できるのでしょうか。法案成立のニュースを聞きながら、不安、心配でいっぱい家族も多いのではないかと推測します。つまり多くの家族にとっては何よりも障害年金の動向を知りたいのです。

障害年金については、特に「精神障害者の不支給割合が2倍に増えた」、「審査が厳しくカルテ開示や医師照会が求められる」。また、「新規申請の不支給率が高い」、「更新申請時の等級落ちが多い」とのマスコミ報道もあって不安な気持ちいる家族も多いと思います。

6月11日厚生労働省が発表した「令和6年度の障害年金の認定状況についての調査報告書概要」を見てみると、なるほど精神障害の非該当割合について他障害とは違う特徴が記載されています。

1) 新規裁定の場合、非該当割合は令和6年度が令和5年度よりも上昇しています。

令和6年度 非該当割合	令和5年度 非該当割合
1000件に対して130件(13%)	1000件に対して84件(8.4%)

2) 新規裁定の非該当割合を障害別にみると精神障害の上昇が大きいのです

令和6年度 非該当割合	令和5年度 非該当割合
精神障害 12.1%	精神障害 6.4%
外部障害 10.8%	外部障害 10.2%
内部障害 20.6%	内部障害 19.4%

いくつかの家族会で精神障害者の収入実態の調査報告があります。それらに共通していることは定期的な生活の収入源順位は、①障害年金(約75%)、②工賃(約24%)、③就労収入(約7%)となっています。重複があり合計100%を超えます。稼働能力が低下している精神障害者にとっては「障害年金が生命線」といえるのです。更に年齢がすすめば「障害年金」と親の遺産等が頼りです。簡単に「生活保護」というわけにはいきません。障害者にとって人生を全うできる社会を求めたいと思う次第です。(赤池千明)

令和7年度 浜松市家族相談員

赤池 千明 090-7024-1674 石樽 ^{すみ}純子 053-453-3972 奥村江身子 090-7304-8823
鈴木 陽子 053-425-4582 白都 努 090-1294-8128 村松 妙子 090-4229-4910

2025年 第22回通常総会報告

- 日時 令和7年6月1日（日） 13時から14時
場所 浜松市福祉交流センター 53多目的室
出席者 会員数87名のうち60名（出席者14名、書面表決及び委任状46名）
内容 ①令和6年度事業報告及び決算を審議し承認されました。
②令和7年度事業計画及び予算案を審議し承認されました。
③昨年度総会で7名の理事が選任されましたが、都合により名の理事が退任いたしました。その補充として次の3名の理事が新たに選任されました。
・理事 伊藤政廣、奥村江身子、高橋浩万（任期は次期総会までの1年）

新任理事3名、大いに語る

奥村江身子さん

明生会を知るきっかけになったのは、精神保健福祉センター行われていた勉強会でした。妹が統合失調症と診断され、どう対処していいのかわからず、別人のようになってしまった妹に対して途方にくれていました。ただ泣きじゃくり、皆様に話を聞いて頂きとても助けられたことを覚えています。統合失調症は本人だけではなく、家族にも大きな影響をもたらす病気で、私自身家族として悩みや不安を抱えていましたが、明生会で悩みを共有してもらい、肩の荷が下り今日まで来られました。家族同士、日々、色々な困難や問題があるかとは思いますが、事務所への電話や来訪をお待ちしています。家族会で支え合い、理解を深め合う場を作っていけたら良い、と願っています。

伊藤政廣さん

私はずっと仕事が第1と思い日々生活してきました。しかし、50代から60代に腰が悪くなり体力も落ちてきたので、腰の治療が続き生体医院の診察で即手術が一番と聞き手術しました。その後、体力が回復し日常生活を送ることができましたが、家庭内でいろいろなことがありました。ある時、浜松市精神保健福祉センター主催の統合失調症の交流会があると聞き、早速、夫婦で参加しました。参加者の女性が熱心に現状を何とかしたいといった言葉が強く印象に残りました。また明生会の方から会の紹介と具体的な活動の説明がありました。機会があれば伺いたいと思い、昨年3月学習会に出席しました。今後も参加者の方とともに学んでいきたいと思っています。

高橋浩万さん

令和7年6月より理事に就任させていただきました。数年前には、理事としてB型事業所の施設長として職務についていました。しばらく明生会から離れた場所にいましたが、いろいろとありまして、明生会に復帰することとなりました。離れている間にも福祉の職員として利用者の支援をしておりました。精神の障害に関する情報を得やすいところにいたこともあり、これらの事柄を明生会に活かせたら、と思っております。

2025 年度 「第 1 回 地域ふれあい講演会」

テーマ : 大地震発生 障がい者や家族がどのように、2 次災害に対応していたか。
～静岡 DWAT の災害支援活動からみえてくるもの～

講師 : 古橋 誠 氏

静岡県災害派遣福祉チーム（静岡 DWAT）登録員
社会福祉法人子羊学園 浜松地区事業推進部長
静岡県社会福祉士会 災害対策委員会 副委員長



災害支援活動

平成 21 年 東日本大震災 南相馬市就労支援継続 B 型事業所
令和 3 年度 熱海市伊豆山土石流災害 避難所
令和 4 年度 静岡市清水区豪雨災害 聞き取り調査
令和 6 年度 石川県能登半島地震 1.5 次避難所



26 名の方が参加していただきました。行政の担当課の方や、静岡 DWAT の事務局の方にも参加いただきました。

どの災害でも、避難所には、障がい者の姿がほとんど見受けられなかった。当事者からの聞き取りでは、避難所に行っても、周囲の方に迷惑をかけるし、環境が変わることによって体調が悪化するからとのことで、避難所を避けていたとのこと。そのため壊れた家や車中泊等で過ごしていた。このような、環境の悪い生活では、エコノミー症候群などの 2 次災害が発生してしまう。そこで、DWAT の方々が 2 次災害を防ぐために聞き取り調査や福祉避難所への移送支援活動を行う。アウトリーチも行うが、事前に登録や申請がないと行えないので、災害に備えた計画等を作成しておく必要があるとのことだった。*「避難生活での支えあい 障害のある方と家族の困りごと」(社福) 全国社会福祉法人 参照。

理事会の報告 — 令和 7 年 3 月から令和 7 年 5 月まで

この 3 ヶ月は事業年度の区切りに当たる時期です。令和 6 年度の事業・決算報告、令和 7 年度の事業計画・予算を計画し決定していく理事会でした。

家族会活動は、令和 6 年度を通じて、広報誌発行、家族ピア学習会での活発な意見交換、行政や静岡県連合会との連携もできたと思います。しかしながら年々の傾向ですが来所又は電話等の家族相談件数が徐々に少なくなっていることを痛感します。次年度への検討事項と考えています。

B 型事業所つばめ創社は、零話 6 年度も 1 日平均利用者数が 15.8 人でした。目標だった 19 人には及びませんでした。業務分析や作業内容等を含めて総合的な見直しが必要と思います。

法人の中長期の課題は会員数の減少と高齢化にあります。また令和 6 年度は家族会と作業所がともに赤字決算でしたので、次年度に解決策を模索すべき大きな課題です。

加 奈

「簡単な私の経歴」

私は今年の夏で37歳、病歴17年目を迎える。その間の精神病棟への入院は6回ほど。旦那と結婚して6年、子どもが生まれ、この子育て中の5年間も、精神疾患の症状とそれに伴う生きづらさを周りに支えてもらいながら過ごしてきた。そして今現在2人目を妊娠中。

私が幼いころに母が精神疾患を発症し、父はアルコール依存、姉は不登校と、精神疾患当事者の家族の立場としても精神疾患と長く付き合ってきた。私自身も17年前の20歳のときに精神疾患を発症し、これは一生付き合っていくものなのだと改めて認識した。

「旦那との出会いから」

旦那と結婚する前の恋人探しでは、結婚も視野に入れて、病気に理解のある人、こんな私や家族をそれでもいいと受け止めてくれて、健康な人。そんな人を求めて出会いを探していた。

これまで様々な人との出会いがあったが、私は幸いにも人に恵まれていて、精神の病気に差別や偏見のない理解のある旦那と出会い、結婚することができた。

それは、理解のない人は私とは縁がない人と、しっかりとした軸があって無理解を恐れずに外に出て出会いを求めたから理解のある今の旦那を見つけられたのではないかと、今になって、自分では思う。「病気を打ち明けてくれた時、誠意がみえたから」。これはのちの旦那の言葉である。私は、病気であることを隠すことなく、交際する際に打ち明けた。

これで病気のことを受け止めてもらえなかったら終了か・・・と考えると伝える瞬間は緊張したのだが、この人は誠実だし大丈夫ともなんとなく感じていた。病気のことを伝えた後、「実は僕も伝えておきたいことがあって・・・」と、これまで話さなかった、彼の秘密を打ち明けてくれた。

それまで、自分の病気のことを伝えて相手も自身の秘密を教えてくれるようなそんな反応は初めてだったので、誠実な人だと、この出来事は今でもとても鮮明に心に残っている。

「薬に対する捉え方の変化」

これまでの結婚生活6年間のなかで私の病気について思い返すと、精神病棟へ2回入院した。入院は毎回私の勝手な断薬による症状の悪化なのだが、私は自分が病気であるという病識をもつことが病歴17年経った今でも難しく、薬を飲まなくてもやっつけていけるようになりたいという思いが強い。そして入院しては家族や旦那に迷惑や心配をかけてきた。

旦那の影響で、最近薬を、身体的に栄養素を補う必要があって、健康的に暮らすためのサプリメントのようなものと捉えていて、薬について重く捉えないようになってから薬をのむことへの抵抗感も減った。今現在、旦那との結婚生活から、病気と共に生きるうえで大切なことを学んでいる最中。

次回、妊娠編へと続く

編集後記・・・

6月というのに暑い。今年も酷暑の時期になってきた。幼いころの夏と感覚が違う。夏は暑いが一瞬のこころ良さがあった。春から初夏、真夏、初秋、晩秋・・・こんな季節の移ろいが1年のいろどりとして心に刻まれ人生の年輪であり生活の機微でもあった。さて、現代の気ぜわしさは一体何なのだろうか。 赤池千明